仁川からの引揚げ

終戦の昭和 20 年 8 月、私は満４歳になった。その２か月後、南朝鮮仁川（現韓国）から日本に帰る為の逃避行が始まった。その頃の思い出は私は幼かった為ほとんど記憶がないが、断片的には少しその時の状況が頭にある。苦労した亡父からはあまり聞いていなかったので、この度の姉の本を読んで本当に驚いている。

今日は仁川～京城～釜山港までの、朝鮮人の暴徒及び朝鮮共産軍が日本人を殺せとの危険いっぱいの中、命からがら 418km 逃避行をした時のことを紹介します。
又それぞれ家族は大きなリュックを背負っているので、幼い私も小さいリュックをしょって歩いたとの事、自分ながら頑張れて良かったと思う。

姉の本より抜粋

「私たちは出発の準備をし、それぞれが割り当てられ荷物を持って、仁川からプサンまで 418km の長い危険な旅をしました。
そこには皆を日本に運ぶ船が待っていると聞いていました。

しかし、そこに着くために、日本人は今やほとんど汽車やバスに乗ることを禁じられて、全員が歩かなければならないことを私たちは知りました。

歳をとった祖母とたった 4 歳の弟がいるのにだれの助けもありませんでした。
私たちはそれぞれ少しの食べ物と水筒を持ちました。父はもちろん日本で埋葬するために母の遺骨を持ちました。加えて、リュックには食べ物を入れ、スーツケースには衣類を入れて運びました。

私のリュックには母が大事にしていた器や高価な着物を入れました。
たくさんの着物は残していかなければなりませんでした。そしてもちろん、2 か月前に死んだ弟澄夫の遺骨、食べ物、水筒を運びました。
かわいそうな弟勝義は誰にも助けられず、小さい足で自分で歩かなければならなかったのは言うまでもありません。

出発する前に、父と叔父が私の安全のためにともう一つの事をしました。
私を座らせて、とても誇りに思っていた黒髪を切ったのです。そして犯されないようにと擦り切れた中国の農民の服を渡しました。私はまるで父親と南に旅行している男の子のように見えました。12 歳の私はまだ強姦の本当の意味を理解してはいませんでしたが、父はナイフを私の軽いジャケットに入れて、強姦されたなら大変な人生を送ることになるともう一度説明しました。

翌日の早朝、私たちの小さい家族、父 41 歳、広子 9 歳、勝義 4 歳、そして私と祖母と叔父は共にプサンへの貨物列車に間に合って乗れることを願いながらソウルに向かいました。私たちはすぐに友人たちや近所の人と会って、全部で 15 人になりました。

私たちは先頭に立って仁川駅に向かって行きましたが、反共産主義委員会の命令で、もは

や汽車は走っていませんでした。私たちが他の方法について話し合っている時、米軍の憲兵が近づいてきました。父は恐れましたが、彼らは子どもたちにチューインガムを配り始めました。私ももらって開いてみると変なものに見えました。他の子どもたちが食べてみると誰も死ななかったので、私も食べてみました。口の中に入れて、3 回噛んでから飲み込みました。そして背の高いアメリカ人が首を振って歩いて行くのを見ました。これが私たちのほとんどがアメリカ人に会った初めでした。そして、父のような年配者は彼らを敵とみなしていたので、子どもたちが何かを受け取ることが心配で、もう二度と何も受け取らないようにと注意しました。

私たちは、朝鮮の一部では汽車が走っていると聞いて、ソウルまでの 39km を歩くことに決めました。「急いで！」と祖母は忠告しました。ソウル駅への近道だったので、私たちは小さな川に沿って歩きました。1 時間以上歩いた後で、祖母が突然止まりました。

「シッ！」　祖母は立ち止まったままで「何か聞こえるよ。」とささやきました。年寄りには聞こえたのに、私たちには何も聞こえませんでした。でも、遠くから近づいてくる足音が聞こえてきました。「早く、野生のアイリスの後ろに隠れなさい！」と父は命じました。みんな、ざわざわする雑草と小石の急な土手をすべりおりました。行進する音はだんだん大きくなりました。私は弟が泣いて、この場所がばれるのではないかと恐れて、弟の近くに行って背中の上に伏せました。彼らは近づいて来て数分のうちに、２０人から３０人の朝鮮の兵士だとわかりました。ついさっきまで歩いていた同じ道を行進して来たのです。父が叔父に「反日共産軍だ」とささやくのを聞きました。私たちは彼らが完全に見えなくなるまでもう少し待ってから、ソウル駅へと向かって行きました。

ついに駅に着いた時、太陽が沈み始め、貨物列車がちょうど駅に入ってくるところでした。すぐにみんなは、普通は動物を市場に運ぶために使われる貨車の中に、苦労しながら入りました。そこは動物の臭いと血の臭いがして、私は鼻と口を押えました。それでも乗ることができたのは喜びでした。

貨車が動き始めた時、横の板のところを見ると、他にもたくさんの人々がいるのを見ました。主婦たち、小さい子供たち、そして後ろにはゆっくり動いている貨車の壁によじ登ろうとしている赤ちゃんたちもいました。

一日中歩いた後で、みんなお腹がすいていたのに、だれも食べ物を与えようとしないことに気が付きました。私はリュックを開けて、家を出る前に作った最後のおにぎりを見つけて、家族に配りました。そして白いご飯に対して小さな赤い梅干しが自分たちの国旗に似ていると気がついて、私は突然泣き始めました。でも暗かったので誰にも気づかれなくてほっとしました。貨物列車は村から村へとゆっくり進んでいく中で、もっともっとたくさんの人々がよじ登って乗ろうとしてきました。私たちの貨車も満員になり始め、一人の男が外と隔てている横の扉を、少しの隙間をのぞいて閉めてしまうまでは、ぎっしりと混雑しました。ついに、多くの人たちは何時間もの旅で眠りに陥りました。他の人々は狭い所に立ったままでした。私たちの貨車に乗っていたのはほとんど日本人でお互いに礼儀を正しく守っていました。時代はとても厳しくて、人々は飢えていました。飢えは人々を変えてしまいます。